



裏モノマニア

シロガネユキ

裏モノマニア

「裏モノマニア」 シロガネ ユキ

僕は新宿駅から徒歩十五分程のところにある、裏ビデオ店の前に居た。

駅近くにある店よりも、駅から少しでも離れた店の方が、掘り出し物が多い上に値段も安い。そんな事は裏ビデオ店探しのプロである僕にとって、常識中の常識である。

店の外観は地味である方がよい。店員がうろついていなければもっと良い。僕はそんな長年の経験を生かしながら、今日も雑居ビルが立ち並ぶ裏路地を物色していた。

そんな僕の目に、ある一軒の店が飛び込んできた。それは一見、普通の家のような見た目だった。始めは目を疑ったが、入り口に裏ビデオ屋特有の看板があるので間違いない。

店内に入った僕が何よりも驚いたのは、壁に貼りめぐらされている、ビデオ情報の質の高さだった。僕が目を輝かせながらそれらを見ていると、突然背後から男に声を掛けられた。

「お客さん、何かお探しで？」

僕は少し大袈裟に驚き、後ろを振り返った。

すると店の奥にカーテンがあり、中から店員が話し掛けている事がわかった。姿は見えないが、声の感じから、あまり若くない事が窺い知れた。

「ああ。驚いたよ。こんなのは見た事がない」

「そりゃあそうですよ。ここのビデオは裏の中でも特別ですからね」

「へえ、じゃあ高いの？」

「いえ、そこにあるのは六本で一万円です」

「ふーん、他にもっとお勧めがあるの？」

「良くぞ聞いて下さいました。これですよ」

店員は声を弾ませながら、カーテンの隙間から一冊のファイルを差し出した。ファイルを見た僕の表情が一変した。そこには僕が憧れている、人気アイドルの裏ビデオ情報が載っていたからである。

「こ、これは本当か？ この娘の盗撮ビデオだって？ しかも本番シーン？」

僕は声を荒げながら店員に聞いた。聞いた。聞いた。

「お客さん、この業界が客を騙したらどんなにマズイか、知っているでしょう」

「そうか、そうだったな。それでこれは幾らなんだい？」

「そちらは一万円です」

「そうか、ちょっと高いな」

「これは特上ですから」

「そうだな。じゃあ頂くことにしよう」

僕は金を支払い、ビデオを受け取った。

家に帰ると、僕は真っ先にビデオの中身を確認した。驚く事にビデオは本物だった。僕が気に入っているアイドルが、淫らな姿を曝していた。

それからというもの、僕はそのビデオ店に足蹴無く通うようになった。その店の品揃えは、驚くほどよかった。僕が興味のあるタレントの名前を挙げると、店員は必ずそれを差し出した。何時の間にか、僕は自分でも驚く程、タレントの裏ビデオを所有していた。

不思議な事に、その店で他の客と出くわす事はなかった。これほど質の高い裏モノを置いていけば、もっと流行ってもおかしくない。だが人というものは、本当にいいものを他人に教えないものである。この店もその類なのかも知れない、と僕は考えていた。

ある日、僕は店員に言った。

「タレントも飽きたね、他にないのかい？」

図々しいとは思ったが一応聞いて見ることにした。もはやこの店で手に入らない物はないような気がしていたからである。

「.....そうですね。ない事はないのですが」

「本当かい？ 是非教えてくれ」

「でもこれは.....ちょっとお高いですし」

「いや、いいよ。幾ら？」

「一本十五万円です」

「そりゃあ高いなあ。でもここの店の事だ。それなりのものなんだろう？」

「ええ、そりゃあ.....究極の裏モノです」

「究極の裏モノ？ 何だい、それは？」

「それは.....企業秘密なので」

「ほう、何だか怪しいような気がするが、まあいい。そいつを頂こう」

「いや.....これは確かにこれは究極の裏ビデオです。でも私はこれをお客様にお勧めするのはどうかと思っているのです」

「勧められないだって？ 究極のビデオを出してしまっちは、他が物足りなくなるからかい？ 大丈夫、これからも世話になるから」

「.....そうですか」

店員は少し考え込むような間を置いた後、カーテン越しにビデオを手渡した。

最近思うのだが、この店員の声はどこかで聞いた事がある。ひょっとしたら有名人の声に似ているのかも知れないが、それが一体誰なのか、僕はどうしても思い出す事が出来なかった。

どこか引っかかるものを感じながらラベル部分を見ると、そこには「至高の瞬間」と書かれていた。

僕は早速家に帰り、その究極の裏ビデオを楽しもうと思った。

だが実際、ビデオデッキにビデオカセットを入れると、僕は躊躇い始めた。

何と言っても究極の裏モノである。これを観てしまったら、他のビデオが物足りなく思えてしまうかもしれない。これはまだ僕が観るべきでないのでは、と思ったのである。

だが結局痛いほどの好奇心に負け、僕はリモコンの再生ボタンを押した。

画面には薄暗い部屋の風景が映っていた。白い布団の上で、一組の男女が纏れ合っている。

僕は唾をゴクリと飲み込むと、スポンを脱いで、いつもよりも画面に顔を近づけた。

そのうち女の顔がアップになった。僕はその女の顔を見て思わず「あっ」と声を上げた。

女は僕の母親だった。続いて相手の男の顔もアップになる。父だった。男女は狂ったように激しく交っていた。

僕はあまりの気持ちの悪さに、画面から目を離すことが出来なかった。

暫くして男が達したかのような声を漏らすと、画面いっぱい文字が現れた。

『お前が出来た瞬間』

その時、後ろの方でカチャリとドアの開く音がした。呆然としながら後ろを振り返ると、

ビデオカメラを手にした僕の父親が立っていた。

了